



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 15, 2012, No. 33

【役員名簿(2012-2014)】(五十音順)

代表：管 啓次郎 (明治大学)
副代表：結城 正美 (金沢大学)
顧問：上遠 恵子 (レイチェル・カーソン日本協会)
西村 頼男 (阪南大学名誉教授)
事務局長：豊里 真弓 (札幌大学)
事務局補佐：
高橋 綾子 (長岡技術科学大学)
会 計：相原 優子 (武蔵野美術大学)
林 直生 (滋賀大学)
監 事：上岡 克己 (高知大学)
ニューズレター編集委員：
辻 和彦 (近畿大学)
平塚 博子 (日本大学)
山本 洋平 (戸板女子短期大学)
会誌編集委員：
小谷 一明 (新潟県立大学)
加藤ダニエラ (中南財經政法大学・中国)
木下 卓 (愛媛大学)
高橋 龍夫 (専修大学)
中川 僚子 (聖心女子大学)
コンピューターセンター：
岩政 伸治 (白百合女子大学)
北国 伸隆 (萩光塩学院)
山城 新 (琉球大学)
評議員：Bruce Allen (清泉女子大学)
浅井 千晶 (千里金蘭大学)
池田 志郎 (熊本大学)
石幡 直樹 (東北大学)
太田 雅孝 (大東文化大学)
茅野 佳子 (明星大学)
黒崎真由美 (湘北短期大学)
塩田 弘 (広島修道大学)
高橋 勤 (九州大学)
高橋 昌子 (三重大学名誉教授)
巽 孝之 (慶応義塾大学)
巴山 岳人 (和歌山大学・非)
村上 清敏 (金沢大学)
横田 由理 (大東文化大学・非)
吉田 美津 (松山大学)
院生代表：山田 悠介 (立教大学・院)
広 報：大野 美砂 (東京海洋大学)
喜納 育江 (琉球大学)
河野 千絵 (日本大学・非)
研究助成：岡島 成行 (大妻女子大学)
高田 賢一 (青山学院大学)
乳井 昌史 (早稲田大学)
野田 研一 (立教大学)
山里 勝己 (琉球大学)
管 啓次郎 (代表)
結城 正美 (副代表)

生きた鹿、死んだ鹿

代表 管 啓次郎 (明治大学)

秋が本当に深まる直前、北海道東端から遠くない野付半島を訪れた。ここは日本最長の砂嘴。どんなメカニズムによるのか、全長28キロにもおよぶという非常に細長い半島が、空から見たならたぶんはらりと落ちた一枚の巨大な鳥の羽根のように、海に突き出ている。最果てというにふさわしい土地だが、完全に平坦な道路はそれでもきれいに舗装され、対向車もない道をしばらく走ってビジターセンターに車を止め、曇った夕方のぼんやりした光の中、湿原を抜ける散策路をひとりで歩いていった。

重く、強い風だ。さえぎるもののない海岸の湿原を歩き、トドワラと呼ばれる、海水に白く枯れたトド松の林を見る。誰もいない。そこからすでに夕闇に変わろうとしている小径をひきかえしてゆく途中で、一頭の鹿に出会った。夢中になって何か名前を知らない植物の葉を食べている。こちらに気づいてもすぐには逃げようもしない。口を動かしたままこちらを見て、きょとんとしている。とてもかわいい。かなり大きくなってはいても、おそらくまだ成獣ではなく今年生まれた若い鹿なのだろう。牝だと思う。ほんの2メートルほどに近づいて動画を撮影すると、さすがに少し後ずさりをし、やがてゆっくりと方向を変えて枯れ草の陰に消えていった。白く丸い尻の毛だけが、まるで宙に浮かぶように最後まで見えていた。

この土地では珍しくもないことなのかもしれない。だが野生動物との遭遇は、つねに人を覚醒させ高揚をもたらす。たった一頭の鹿と、至近距離で目と目を見交わすことの、強いよろこび。その満足感につつまれつつ、ヘッドライトを点灯して根室の街をめざして走ってゆく。車の光がなければ漆黒のその道は、たぶん海の間際を走っているのだが、木立にさえぎられて何も見えない。国道244号。前後に他の車がまったくいない。なだらかな起伏のある、暗い暗い道だ。

軽い不安を感じながら走るうち、あるカーブをまがったところで路面に何か大きなものを見てスピードを落とした。鹿だ。倒れてい

る。巨大な鹿だ。減速し、それを除けて通り過ぎてから車を止め、近づいて見た。明かりがない。車の向きを変えてヘッドライトで照らすことも考えたが、いかに交通量が少なくともそれは危険だろう。暗い路面に黒い塊にしか見えないそれに近づき、コンパクト・カメラでフラッシュ撮影し、ディスプレイを確認する。

目立った外傷はない。ただ鼻面から血を流し、さらに見ると一方の眼球が飛び出しかけている。頭を強く打ったのだろうか。まちがいなく車との衝突であり、道路沿いにあれほど書かれている野生動物の飛び出し注意という警告の意味を、この鹿が実地に教えてくれた。かわいそうに。牝の成獣だろう。だがこれをどうすればいいのか、まだ熱いほど温かいそれを引きずってでも道端に動かしておくべきか、この車（レンタカーの軽自動車）に積んで町に運ぶか（だがシートが血で汚れたら？）。結局、何もせず、ただせめてもの供養にと「南無阿弥陀仏」を十遍唱えてからその場を立ち去った。何もしなかった、何もできなかった。

生きた鹿と死んだ鹿。1時間も隔たりのないあいだに出会った、この2頭。そしてこの2頭にこんなかたちで出会った人間は、ほくだけ。たしかにエゾシカは増えているのだろう。その食害を論じたり、個体数の調整のために狼の再導入を夢想したり、食材としてのその多彩な可能性を考えたり、ヒトはいずれにせよ言葉によって鹿との関係を画定しようとする。たしかにそこにいるおびただしい生命たちに対して、ヒトが結局はそうせざるをえないのは、言葉とイメージ（線描や絵画であれ写真や映像であれ）によって相手を思い描き、その位置を指定し、その相手との関係を作り、作り替えてゆくことだ。「われわれはついに生命そのものに直接ふれることがない」とまではいわなくても、直接の接触よりもはるかに大きく、まず言葉とイメージの体験として動植物を認め、知り、反応する。知識を蓄え、また具体的な行動のための戦略を立てる。

白鳥の飛来地としても有名な風蓮湖沿いを（湖面はまるで見えないままに）走りつづけながら、さきほどの生きた鹿、死んだ鹿のことを思い、どうにもやりきれない気分になっていた。現代は大型野生動物の大絶滅時代だ。都市化の進んだ区域では、ヒトによって認可された動物種だけが生存を許される。そして都市の網の目は地表の全体をおおい、ウィルダネスの場もすべて都市に接続されている。あるいは、都市に接続されたかたちでしか体験されない。たぶんそのせいで、野生動物との遭遇といっても、どこか嘘っぽさがつきまとう。すでに人間世界によって追いつめられ榨づけられた「野生」を目撃し、よろこび、その先は特に考えず、より大きな問いはすべて先送りにしてゆく。忘却する。

そこからが批評の仕事になるのかもしれない。批評とは、端的に言って、多くの人が見過ごすことに気づくことだ。忘れられていることを思い出すことだ。別の視野を開きつづけることだ。異なるフレームを提示し、その意味を探ることだ。そのためにはあらゆる知識を総動員する必要がある。ASLEの仕事が文学研究をつうじて環境をめぐる思想や行動を組み替えてゆくことだとしたら、その仕事の前線は私たちひとりひとりの日常生活にあり、とりくむべき対象は「生命」をめぐるって交わされ流通するすべての言葉、すべてのイメージだということになるだろう。私たちの活動領域は想像力、しかしその想像力はつねに現実のout thereと直結したものであるべきだろう。

ヒトという種はみずからを追いつめ、また人間化された区域のとめどない拡大とともに多くの他の種を追いつめている。どんな未来を選ぶのかが日々問われているにもかかわらず、なすべき術もないとでもいうように、私たちは茫然と立ちつくしている。もういちど、何度でも、基本に戻ろう。ヒトと他の生命のあいだのインターフェースをどのように想像することができるのか。どんな言葉とイメージが手がかりになるのか。文学研究の茫洋とした広大さの中で、エコクリティシズムが今後ある中心的な位置を占めることは疑えないと思う。そしてそれは、私たちがASLEとして現代社会に対して提示しうるものの、範囲と意義をしめす。猶予はない。この活動を進めよう。

2012年8月31日から9月2日まで、第18回ASLE-JAPAN／文学・環境学会全国大会が近畿大学本部キャンパスにおいて開催されました。熱気溢れる大会の様子を参加者に報告していただきました。(編集部)

第18回ASLE-JAPAN／文学・環境学会

小 椋 道 晃 (立教大学・院)

2012年8月31日から9月2日まで、第18回ASLE-JAPAN／文学・環境学会全国大会が近畿大学本部キャンパスにおいて開催されました。初日の午前中に行われた読書会は、オプション・メニューとして、朝早い時間からのスタートにもかかわらず、企画者である山田悠介氏も予想していなかったというほどの大盛況でした。ここでは、Lawrence Buellをはじめとする執筆者による“Literature and Environment”という論文を、「場所」「科学」「ジェンダー」「(ポスト)コロニアリズム」「土着性」「動物」というテーマごとに、それぞれ、太田貴大氏、巴山岳人氏、喜納育江先生、豊里真弓先生、結城正美先生、そして山田氏が議論を要約し、個々の問題意識に沿ってポイントを提示されました。批評的枠組としての「エコクリティシズム」の現状認識について、参加者からのコメントを含め、その問題点と、さらなる発展の可能性を垣間見ることのできる非常に濃密な時間となったように思います。

午後は、ハーマン・メルヴィルの『タイピー』における、自然、風景をめぐる表象の問題を論じる私自身の研究発表からはじまり、山田悠介氏、茅野佳子先生のお二人が発表されました。山田氏は、加藤幸子や梨木香歩の作品における動物を〈かたる〉という行為について論じ、そこから人間中心主義を相対化する可能性を検討されました。茅野先生は、アーネスト・T・シートンをめぐる評伝や著作を通して、ネイチャー・フェイク論争とシートンとの関わりを再度検証されました。細部の情報やハンドアウトの情報量の多さが顕著に示すように、非常に熱のこもったご発表でした。

続いて、辻和彦先生が司会をされた「古典と環境」と題するシンポジウム。浜本隆三先生によるマーク・トウェインの旅行記における作家の自然を見つめる眼差しから、塩田弘先生による、ご自身とも関係の深い八田謹二郎にみる近代的森林保全の思想について、また、高橋綾子先生の、ゲーリー・スナイダー作品と道元の『正法眼蔵』解釈をめぐる影響関係、そして、吉岡ちはる先生による、E・M・フォースターの『ハワーズ・エンド』におけるエコリベラリズムの可能性、というように、「古典」と「自然」を、発表者独自の観点からスリリングに読み直すという企画でした。

大会基調講演では、東京大学名誉教授の渡辺利雄先生が、ご自身のソローとの出会いから、ネイチャーライティングへの深い関心について、興味深いお話をしてくださいました。とりわけ印象的だったのは、ご講演の最中に、先生の『ウォールデン』の日本語訳についての厳しいご指摘と共鳴するかのよう(？)、突然の雷鳴とともに、激しいにわか雨が降り出したことです。文学作品を読むということの前提に、一字一句おろそかにできないテキストの精読が基本にあるということであらためて噛み締めた次第です。その後、ちょうど、雨も小降りとなり、気温も幾分下がったところで、一日目のプログラムはすべて終了し、懇親会場である創作料理屋へ移動しました。非常に盛りだくさんの企画で、会場で意見交換をする時間があまりなかったこともあり、懇親会では、多くの参加者とともに様々な議論が飛び交うなか、大いに盛り上がりを見せました。

大会二日目は、午前中の役員会および総会のあと、John Rippey先生、内藤貴子氏、戸谷洋志氏の研究発表がありました。Rippey先生は、都市と田園との境界にある“edgelands”という概念の豊かな可能性について論じられ、内藤氏は、イギリス児童文学の作家であるデイビッド・アーモンドの作品における自然表象について、そ

れが人と自然の関係性においていかに機能しているかを検討されました。戸谷氏のご発表は、哲学者ハンス・ヨナスが提起した責任倫理学のなかでも、とりわけ重要な彼の生命論の独自性を浮かび上がらせるものでした。

続いて、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』出版50年を記念した企画として、浅井千晶先生、上岡克己先生、岩政伸治先生、多田満先生、真野剛先生によるラウンドテーブルがありました。福島第一原発の事故による放射能汚染の問題を受けて、あらためてカーソンの著作の先駆性とその意義を、それぞれの発表者が様々に異なるアプローチで迫るものでした。二日目を締めくくる最後のシンポジウムは、結城先生が企画されている、次号の学会誌の特集「境界の食風景」に先立つかたちで、穴見慎一先生、河野千絵先生、深水護先生が、それぞれ〈境界〉としての「食」をめぐってご発表をされました。穴見先生は、宮沢賢治作品における食の風景を検討され、また河野先生は、近現代の歌人による〈水〉をめぐる作品を題材に考察し、深水先生は、主に食品リスク論（と文学作品とのかかわり）について論じられました。

異なる分野の研究者たちが、「環境」をめぐると問題意識を共有し、議論しあうという、文学・環境学会における学際的研究の実践的「場」として、今回の全国大会も、参加者それぞれの専門分野と関心のなかで、自らの思考を触発する〈手がかり〉のようなものを得られたのではないかと思います。最後になりましたが、企画、運営をしてくださった辻和彦先生、浅井千晶先生、塚田幸光先生、そして、近畿大学の学生の皆さまに、あらためて御礼申し上げたいと思います。

環境文学が環境にどのくらい依存しているのかを考えた年次大会参加報告

太田 貴大 (名古屋大学・院)

私はいつも、様々な分野が生物保全に貢献可能かどうかを考えている。文学研究もまた例外でなくその対象となった。文学研究が生物保全に貢献しうることを初めて知ったのは、ミレニアム生態系評価のInspirational Services (Global Assessment Reports, Vol.1, pp.465-467. <http://www.maweb.org/>)を読んだ時である。確かに、自然環境を扱う環境文学作品の書き手は、直接的もしくは間接的に、自然環境から「ひらめき」を得ているはずだ。そして、対象となる自然環境が変化あるいは消失すれば、「ひらめき」にも大きな影響が及ぶだろう。つまり、作品の書き手は、自然環境に強く依存しており、また、その作品を享受する読み手も間接的に自然環境に依存していると考えられる。そうであるならば、自然環境を扱う環境文学作品の書き手や読み手、そしてそれを研究対象とする環境文学研究者は、生物多様性の減少という地球環境問題のステークホルダーの一人ともいえるだろう。

おそらく、この考え方は多くの文学・環境学会員にとって至極当たり前のことであろう。今更確認する必要すらないのかもしれない。では、文学・環境学会は、文学に興味関心のある人々が集う学界として、生物保全にどの程度貢献しているのだろうか。また、文学研究者の持つ専門性を、生物保全に目に見える形で生かすにはどうすればよいのだろうか。私は、自然・環境に興味関心を持つ文学界が生物保全にさらに大きな貢献をする可能性を追求するために本学会に入会した。

上記を背景として、年次大会に初めて参加する機会を得た。私の専攻である生物学や政策科学とは異なる文学研究の学会大会に初めて参加して感じた新鮮な驚きと、それを基に考えたことを記しておきたい。

初めに、院生組織代表の山田氏の呼びかけで行われた読書会に参加した。対象の総説論文は私のような門外漢にとってこの分野を概観するために非常に意義深いものであった。また、読書会は、若手の会の学会大会におけるプレゼンスを示す方法として非常に有効だと感じた。そして、文学研究の経験を持つわけでもない初参加者に、発言の場を与えてくれる学会のオープンさと環境を対象とした学問の食欲さを感じることができた。

次に、どの学会大会でも通常行われるであろう口頭発表に参加した。最も驚いたのは、プレゼンテーションに

視覚的手段を用いず、書かれたテキストを読み上げるという発表のスタイルである。これは、文学研究の洗礼であった。作品の解釈や説明という文学研究の目的からすると、視覚的手段を用いない方が有効だということなのか。そして口頭であっても、文章構成、修辞、音の美しさといった文学作品の要素に重きを置くということなのか。

しかし、発表スタイルの新鮮さと共に、生物保全を背景とする私がとても興味を持ったのは、文学を研究する者の感覚である。それは、目に見えるものと見えないもののどちらに重きを置くかということである。私は、あの発表スタイルを見て、目の前にあるものではない何かに重きを置いている発表者の意図を感じた。多くの自然科学は、目に見えるものかなりの比重を置いているだろう。政策科学では、定性的な分析も行われるが、やはり結果としての指標や統計値に重きを置くだろう。文学研究は、テキストつまり目に見えるものかなりの比重を置いているだろう。同時に、テキストの表現する内容（頭の中で見える）もの、書き手の持つ背景等、テキストでは見えないものにも重きを置いているだろう。目に見えないものを解釈し説得的に説明するという手法が、目に見えるものを求める生物保全の中でどのような役割を持つことができるのだろうか。

環境文学がどの程度自然環境に依存しているのかに興味を持っている。その依存の形には、目に見えないものがたくさん含まれているだろう。これを目に見えるものとして表すことで、生物保全に大きな貢献が可能だと信じている。同時に、目に見えないけれど重要な何かも特定していく必要がある。新たな可能性と共に、とても大きな課題を見つけることができ、有意義な大会であった。大会実行委員会の皆様方には、深く御礼申し上げたい。

エクスカージョン：上町台地研究調査報告

大田垣 裕子（プール学院大学）

写真とコメント：澤田 由紀子（甲南大学非常勤）

大会第3日目の午前中、上町台地の街歩きに参加した。このウォークの目的は環境、歴史、文化、社会の多角的視点から都市を再考することにある。地下鉄堺筋線恵美須町駅を10時に出発し通天閣をめざして歩き出した。まず、今年100周年のタワーをバックに澤田先生のカメラで全体写真撮影。「この辺りでモーニングセットを注文すればビールが出てくる」と辻先生が説明して下さる。店先に鎮座している巨大なピリケンさんの足の裏を村上先生がさすっぺいらっしやる。何を祈願されているのか。

堀越しに豊かな緑の木々がのぞく天王寺動物園の方へ進み、松屋町筋を横断、細い通りに入ればしばらく行くと、真田幸村戦死跡之碑のある安居神社に到着。幸村が寄りかかって身を休めたというさなだ松は2代目とのこと。安居神社から天神坂を横切り、清水寺を通り過ぎる。ここでも辻先生による逢坂七坂と七名水のレクチャー。良質な井戸水が人々の暮らしを支えてきたが、谷町線地下鉄工事のため水脈が変化して大半は枯れてしまった。「谷町線がなければ生きていけません」という声が谷町沿線にお住まいの巴山先生から上がる。通勤で毎日大阪市内を地下鉄で通過するだけの私は、初めてこの辺に多くの急坂があることに気づいた。大阪平野のほぼ南北方向に活断層が走っており、かつては上町台地の東側にも西側にも海が迫っていた。それゆえ大阪には山手、下町という呼び方がなく、上町や谷町なのである。夕日丘という地名にも納得

大阪といえばここ、通天閣。
いざ、大阪のディープな世界に出発！



した。台地の北端には立地の良さをいかして難波宮や大阪城が建造された。

上町台地を北に進むと下寺町がある。江戸時代初期に南北一列に数多くの寺院が集められた。大木が多い静かな緑地帯で学校や公園も散見される。歩を進めるとかなりの数のある種の宿泊施設が寺院に隣接して建てられているのが目にとまった。アレン先生はこの聖俗混交の現象について日本古来の習俗として茶目っ気たっぷりに説明された。後日、「愛と仏の町」と呼ばれていることも知った。前方に人だかりが見え、アドバルーンが上がっている。近づいてみると生玉神社で開かれている彦八まつりであった。上方落語の祖、米澤彦八を記念する祭である。境内には賑やかに色々な種類の絵馬がかかっていた。家造祖などという絵馬もある。浅井先生が「凶後吉」というめずらしいお御籤を見せて下さった。以前ここで引かれたそうである。

生玉神社から地下鉄で鶴橋へ移動し、昼食をとる。有名な焼肉でなく韓国風冷麺をいただいた。塚田先生と辻先生が大盛にチャレンジされた。とても美味しく、大盛にしておけばよかったと後悔した。店を出て、「来年は白百合で会いましょう！」という村上先生のお言葉でツアーは終了した。

初めて大会に参加させていただき、様々な新しい視点をいただきました。特に上町台地ウォークは近場でありながら未知の時空間を経験できました。周到な準備をしてくださいました辻先生、浅井先生に深く感謝いたします。

通天閣下の串カツ屋密集地。ここでは朝から一杯の方がたくさんいらっしゃいます。



家具屋さんや人形屋さんの多い松屋町筋（大阪は南北に通るのが「筋」、東西は「通」です）を超えて、真田幸村終焉の地のある安居神社へ。境内には真田幸村の碑があり、お供え物が絶えない様子が覗えます。

上町台地は良質な井戸水で有名で、天王寺七名水（金龍、有栖、増井、安井、玉手、亀井、逢坂）の七つの井戸がありました。残念ながら現在は、金龍と亀井の水を残して枯れてしまい、ここはその残ったうちのひとつ、“金龍清水”です。
たいしょうじ
泰聖寺境内にあります。



愛染坂を上ります。この上には愛染堂と、タイガースの守り神・狛虎がいる大江神社があります。この辺りは高台で夕陽が美しく見えることから「夕陽丘」の地名がつけられたそうです。



夕陽丘のお寺さんの通りにて。後方に日本一の高さのビルとなった「あべのHARKAS」が見えます。



豊臣秀吉によって今の地に移された生國魂神社には、境内社がたくさんあり、それぞれいろいろな御利益があります。皆、自分は何にしようかと話しておりました。この日は、この生國魂神社境内で上方落語の原型となった大道芸をしていたとされる、上方落語の始祖「米沢彦八」にちなんだ彦八祭りが行われていました。本物の落語家さんが出店をだし、境内で落語が披露されておりました。



猛暑の大阪を歩いて、最後は鶴橋で韓国冷麺！BIG SIZEに挑戦したお二人。冷えたビールと一緒にペロリ、でした。

「シネマ×環境」 シリーズエッセイ

シネマ×環境 (1) — ニコラウス・ゲイハルター『いのちの食べかた』—

塚田幸光 (関西学院大学)

映画は如何に「環境」を描くのか。近年、「環境」はドキュメンタリーを経由して、限りなく政治に接近していることは周知だろう。環境は、もはやメロドラマやアクションの背景ではない。『不都合な真実』(*An Inconvenient Truth*, 2006) や『フード・インク』(*Food, Inc.*, 2008) のヒットは、人々の環境に対する関心の裏返しであり、その不安を逆照射してはいなかったか。シネマと環境の文化学、或いはその政治学。9.11と3.11を経験した今、シネマと環境は考察すべきテーマとなる。

「シネマ×環境」の第1回は、ニコラウス・ゲイハルターの『いのちの食べかた』(*Our Daily Bread*, 2005) を見ていこう。僕らが毎日食べているものは、何処で生まれ、育てられ、如何に市場に流通するのか。「食」生成のリアルである。

僕らが弁当の向こう側を見ることは希だ。卵焼き、焼きサケ、ウインナー、肉じゃが、トマト、リンゴ等々。卵焼きを見て、鶏と養鶏所をイメージ出来る人はやはり少ない(イメージすると、食べ物が美味しくないかも)。だが、スーパーやコンビニで普通に買える「食べ物」は、元を辿れば、牛や鶏という生き物である。そして、「牛」(生き物)から「牛肉」(商品)への「流れ」に対し、我々にはあまりにも無自覚だろう。だからこそ、「食」の始まりを見ることは意味がある。『いのちの食べかた』で紹介される食べ物は、全部で16種類。すべて弁当に入っているような、ごく「普通」の食べ物/生き物。牛であれば、人工授精から出産、屠畜による解体に至る風景が、ナレーションを介さず、映像のみによって語られる。まるで工場で製品が作られるように、牛から「牛肉」が作られるわけだが、そこには乾いた機械音が響き、静謐な映像が全開する。

ゲイハルターは、チェルノブイリ原発や未開の文明をフィルムに収めたドキュメンタリー監督である。骨太の社会派であり、日常のふとした疑問とその背後に見え隠れする社会問題を繋げ、議論の切り口はシャープだ。「この映画を撮ったきっかけは、食料品がどんどん安くなっていくことに気がついたからです。50年代と比べて、ヨーロッパ人家庭のエンゲル係数がどんどん低くなっている。これはどういうことなんだろう、と。ちょうどその頃(2000年初頭)に牛乳やバターなどの生産過程についてのスキャンダルがあり、作りすぎた食料を大量に処分して大騒ぎになって、そしてしばらくして、何事もなかったかのように忘れられました。だから、取り上げるべきだと思った。表に出ている数字だとか広告とはかけはなれたところに、真実があるのではないかと」。「食」の不都合な真実を見ること。僕らは食べないと生きられない。だが、その「食」の向こう側に対しては、無意識に(或いは意識的に)目をつぶるのだ。鶏を絞める光景を思い浮かべながら、フライドチキンは食べられないからだ。

『いのちの食べかた』は、ゲイハルターの「食」への思考が遺憾なく発揮される。興味深いのは、その構図/フレームだ。キッチリで、細部もくっきり。ゲイハルターは、シンメトリカルで、ディープフォーカスを駆使する近未来的な構図を多用する。デュッセルドルフ・アカデミーのベッヒャー的美学、或いはその弟子アンドレアス・グルスキーのフォトグラフの影響は明らかだろう。ゲイハルターは固定カメラで、目前の風景を切り取る。映像も音も等価であり、対象全てにフォーカスを当てることで(ディープフォーカス)、特定のものを強調しない。観客の感情移入を拒む映像は、ベッヒャー派が好んだ産業建造物のフォトグラフと二重写しとなる。その無機質感は、例えばスタンリー・キューブリックの映像美学に限りなく近い(『2001年宇宙の旅』(*2001: A Space Odyssey*, 1968)と『いのちの食べかた』は、構図という点においては、相似形とも言えるのだ)。では、実際にショットを見よう。



図1 岩塩の採掘場



図2 豚の枝肉



図3 立体孵卵器



図4 ブロイラー



図5 余った皮を切る

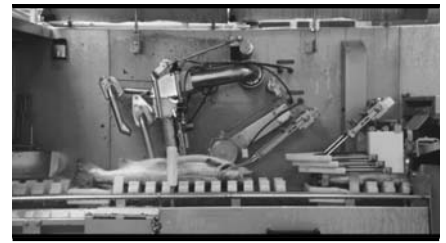


図6 サケの加工

シンメトリカルとディープフォーカスを駆使した映像は、遠近法を用いた西洋絵画に接近する。その光景は、深遠であり、静謐。図1の岩塩の採掘場などは、宇宙空間に接近し、生命の存在からは遠い。だが、塩やナッツではなく、生き物を扱うとき、そこにあるのは紛れもない「命」、そしてその残滓である。図2では、四肢や頭、皮膚を除いた豚の「枝肉」がつるさされている。屠畜後の肉の熟成風景は、豚の死体安置所に他ならない（ロッキーならばこの肉をサンドバックに見立てるだろう。彼の場合は牛だったが）。図3と図4は、共に「鶏」関係。1台あたり数万個の卵を収容できる立体孵卵器が整然と配置され、孵化に最適な条件を管理しながら、そこで卵は雛となる。その後、雛はベルトコンベアで運ばれ、ワクチンを打たれ、養鶏場に送られる。鶏は卵を産み続けるか、ブロイラーとして、「鶏肉」になるか、或いはこのプロセスの過程で、死体として処理されるかのいずれかだ。システムティックに命が生み出され、管理され、殺められる。図5のショットのように、食肉として処置された鶏は、「商品」となるべく（見栄えよく）加工される。機械音だけがこだまする驚愕の風景において、ヘッドフォンをした従業員は静寂のなかで、果てることない仕事を続けるというわけだ。すべては僕ら人間の「食」のためであり、それ以外の目的はない。「食」の工場では、命は省みられない。図6のサケ加工ショットは、命がシステムティックに奪われ、むしろ命のない機械こそが命を持っているかのような、奇妙な錯覚を覚えるだろう。

命を作り、それを奪う。「我らが日々の糧」（映画の原題）は、数多の犠牲のもとで得られるわけで、だからこそ、無自覚というわけにはいかない。『いのちの食べかた』が興味深いのは、その犠牲、つまり本来タブーであった「屠畜」をフィルムに収めた点だろう。ゲイハルターは言う。「屠畜場を撮るのは、危ないですよ。とても美しく強烈な場所だから」。キレイはキタナイに反転し、さらに裏返る。屠畜を撮るとは、「食」の意味を再考することに等しい。「美しく強烈な場所」は、命の意味を問う。命をいただく。だからこそ、「いただきます」と、僕らは言わねばならないのだ。

書籍情報

- ・伊藤詔子監修・新田玲子編、『カウンター・ナラティヴから語るアメリカ文学』、音羽書房鶴見書店、2012
- ・日本ソロー学会編、『ソローとアメリカ精神－英米文学の源流を求めて』、金星堂、2012

院生組織からの御礼

前号のニューズレターで告知をさせていただきました、今年度の全国大会における読書会「エコクリティシズムの『今』を読む：L・ビュエル、U・ハイザ、K・ソーンバー “Literature and Environment”」には、大会初日の午前中という時間帯にもかかわらず、20名近くの会員の皆様に足をお運びいただき、盛会のうちに幕を閉じることができました。読書会開催にご協力くださったすべての皆様に、院生組織を代表いたしまして、この場をお借りして厚く御礼を申し上げたいと存じます。ありがとうございました。

ありがたいことに、「ぜひ来年以降も継続してはどうか」というお言葉もちらほらと頂戴することができましたので、院生組織として、次回の全国大会でも皆様にお楽しみいただけるような企画を提案できればと考えております。今後とも、院生組織の活動にご協力いただけましたら幸甚です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

院生組織代表 山田悠介（立教大学・院）

広報からのお知らせ

2012年10月にASLE-J書誌情報更新版のアップロードが完了いたしました。アドレスは以下のとおりです。ご協力下さいました皆様、ありがとうございました。

<http://www.asle-japan.org/publications/会員による出版物/>

今後も定期的に情報の更新をまいりますので、会員の皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の大野美砂（misa@kaiyodai.ac.jp）までお送り下さい。次回の更新は2013年5月ごろを予定いたしております。具体的な締め切りなどにつきましては改めてご案内をさせていただきますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。これまで情報をお寄せいただかなかった方々からのご連絡もお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ASLE-J 広報委員 喜納育江、大野美砂、河野千絵

会誌編集委員会からのご投稿のお願い

会誌編集委員会では、『文学と環境』第16号の原稿を募集しております。会誌第15号巻末の投稿規程をご覧の上、ふるってご投稿ください。尚、本年度全国大会において、投稿規程の一部改正が承認されておりますので、以下の変更にご注意いただきますようお願いいたします。

「3. 応募原稿の体裁および書式（1）」について

応募原稿の表紙には、表題のみを記入。また表紙とは別紙に、表題、氏名、所属先および連絡先（Tel, Fax, E-mail等）を記入する、と変更。

「4. 応募原稿の分量（1）」について

和文の場合、A4版用紙も横書きで40字×30行、15枚以内、と変更。

投稿における引用文献等の書式は、ASLE-Japanホームページにて公開しております。「<http://www.asle-japan.org/>」→「Publications」→「会誌『文学と環境』」と進み、「会誌投稿における引用・参照と引用文献の書式について」をご覧ください。

応募原稿の提出期限は2013年3月15日（必着）です。ご投稿をお考えの場合は、編集の都合上、2013年3月1日までに会誌編集委員会（nakagawa@u-sacred-heart.ac.jpおよびkodani@da2.so-net.ne.jp）まで、その旨ご一報いただければありがたく存じます。会員の皆様のご投稿をお待ちしております。

会誌編集委員会（中川僚子・小谷一明・木下卓・高橋龍夫・加藤ダニエラ）

事務局より

<2012年度ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会総会のご報告>

2012年9月1日(土、12:20~12:55)に、近畿大学本部キャンパス(大阪府東大阪市小若江3-4-1) Blossom Café 3階にて、2012年度総会が開かれました。まず、審議事項として、2011年度会計および監査報告、2012年度予算案、一部役員改選案、次年度全国大会案、『文学と環境』「投稿規定」改正に関する案、ASLE-Taiwan主催アジア圏ASLE合同シンポジウム(台湾)へのASLE-Japan派遣メンバーに関する案、ASLE-Japan 20周年記念出版事業に関する案、学会ホームページでの会誌またはニューズレターの公開および公開範囲に関する案、会計実態の改善に向けた報告と提案に関する案について担当役員より説明があり、審議を経て了承されました。続いて、2011年度活動内容、会誌・ニューズレターの発行、現会員数(179名)、ASLE-Japanホームページにおける「会員書誌情報」更新、院生組織の活動、学会ホームページのリニューアルについての報告がありました。その他、来日研修を希望するASLEC-ANZ会員よりASLE-Japanに対し、来日の際の受入機関の紹介依頼があり、対応している旨報告がありました。なお、今回の総会およびそれに先立つ役員会では、引き続き、会計実態の改善に向けた対策をとる方向性も確認されました。

<2013年度ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会を白百合女子大学にて開催します>

来年度の全国大会は、岩政伸治委員を大会実行委員長とし、以下の日程で、白百合女子大学にて開催することとなりました。

と き：2013年8月30日(金)~9月1日(日)(※暫定案；確定次第お知らせします)

と ころ：白百合女子大学(東京都調布市緑ヶ丘1丁目25番地)

※日程およびプログラムの詳細については、確定次第、会員メーリングリストやASLE-Japanホームページにてお知らせいたします。

2013年度全国大会での研究発表、ラウンドテーブル、シンポジウムを募集します。タイトル、発表要旨(800字程度)、連絡先を岩政大会実行委員長(白百合女子大学)までお送りください。

送付先：〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1丁目25番地

白百合女子大学 英語英文学科 岩政伸治研究室

締 切：2013年4月24日(水)

アメリカ黒人霊歌

19世紀・20世紀初頭文献復刻集成 全4巻

American Negro Spirituals

Compiled with a Japanese Commentary

監修および和文解説 ウェルズ恵子(立命館大学文学部)

2012年8月刊行 4 Vols.+和文解説書, 1,500p., Hard.

ISBN 978-4-905211-02-0..... 通常価 ¥99,750[税込]



EPM, JPN / 日本総代理店: 丸善

丸善・ユーリカプレス 共同企画 第3弾!



アフリカ系アメリカ人とその文化を理解する上で欠かせない黒人霊歌の、展開と受容・研究の歴史を、貴重文献により辿る初の復刻コレクション。文献として記録された最初期の南北戦争の時代から、白人研究者が登場した1910年代までの流行期まで、最も重要とされる文献を精選。

M MARUZEN

丸善株式会社 学術情報ソリューション事業部 商品センター

〒105-0022 東京都港区海岸1-9-18 国際浜松町ビル TEL: 03-6367-6079 FAX: 03-6367-6207

<会費納入のお願い>

2012年6月発行の Newsletter No.32 に添えて、会費納入のお願いをいたしました。

会費未納の方は、至急、下記郵便口座へお振込みください。(一般 5,000円、学生 2,000円)

口座番号 01300-0-93821
 加入者名 文学環境学会
 (フリガナ：ブンガクカンキョウガクカイ)

<寄贈図書>

次の図書を学会に寄贈していただきました。誠にありがとうございました。お読みにになりたい方にはお貸しします。事務局までご連絡ください。なお、送料はご負担ください。

- ・藤江啓子著『空間と時間のなかのメルヴィールーポストコロニアルな視座から解明する彼のアメリカと地球（惑星）のヴィジョン』晃洋書房、2012年。
- ・エコクリティシズム研究会『エコクリティシズム・レビュー』No.5、2012年。

<会員情報の訂正・更新について>

会員の皆様へ、事務局より改めてお願いがございます。名簿掲載事項【氏名・連絡先住所・電話番号・メールアドレス・所属・研究分野】に変更がございましたら、すみやかに事務局補佐・高橋 (tayako@vos.nagaokaut.ac.jp) まで直接ご連絡ください。事務局としては、ご本人と名簿管理担当者とが直接やりとりをすることで正確な情報管理をしていきたいと存じます。ご協力の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。



大学生時代に恩師が音楽喫茶(?)に連れて行ってくれた。怪しげな階段を降り、地下の穴蔵のような場所に辿り着くと、小さな犬が尻尾を振っていた。置いてある家具や調度品は何もかも古くさく、店主の老夫婦も同じくらい擦り切れていた。いつも大音量で歌劇が流れていた。何となくイコゴチがよくて、その後数度通った。

いつしかその場所もなくなり、その恩師にもそこでの思い出について伺ったことはない。そのことについて考えるのは、何となく怖い。

かたちあるものは、いずれ消え去っていく。学会のニューズレターなど「残る」ことなど前提にされていないのかもしれない。だがASLE-Jを巡って、こんなにも多くの方が、こんなにも多くの場所で、こんなにも多くの善意をもって、今日も活動していらっしゃることを、歴史に確かに刻みたい。



【発行】

代表 管啓次郎
 事務局：札幌大学 豊里真弓
 〒062-8520
 札幌市豊平区西岡3条7丁目3番1号
 Tel/Fax: 011-852-9617 (直通)
 E-mail: toyosato-m@sapporo-u.ac.jp

【編集】

編集代表：辻 和彦
 〒577-8502
 大阪府東大阪市小若江3-4-1
 近畿大学文芸学部
 E-mail: twain1910@gmail.com